

基調講演

「アジア、世界の湾の現状と富山湾の可能性」

講師 日本海学推進機構会長、総合地球環境学研究所名誉教授

秋道 智彌 氏

（富山湾の見方と景観）

- ・岩瀬の海岸、氷見の沖合、立山に登って、あるいは1,000mの海底からなど、見る人の仕事や考え方に拠り、富山湾を眺める視点は変わる。

（富山湾におけるハマグリ漁業と蜃気楼）

- ・中国の『史記』には、蜃気楼の「蜃」は大きなハマグリのことと書かれている。ハマグリが口を開けて気を吐くと、そこに高い楼閣が出来る、それが蜃気楼であり、だから、「ハマグリが蜃気楼を作る」という故事。江戸時代の『今昔百鬼拾遺』にその絵が載っている。
- ・ハマグリを産して蜃気楼が見える所は富山湾だけだとして、付加価値を高めることができるかもしれない。庄川や神通川の河口部では、現在もハマグリが捕れる。

（サケ・マス・アユ・黒作りについて）

- ・江戸時代の『日本山海名産図絵』にマス漁の絵があり、越中神通川のものは絶品だと書かれている。
- ・明治天皇以降、神通川が、皇室のサケ・マス・アユの御漁場となった。神通川が皇室にとっていかに重要な川であったかということが、『神通川誌』に書かれている。
- ・八代将軍・徳川吉宗は、富山藩から献上された「黒作り」や「アユのなれずし」を食べて喜んだと言われている。これだけでも話が広がる。

（湧水と埋没林・ブリ）

- ・有名な富山湾の埋没林と海底林は、海底湧水のおかげで残ったもの。
- ・『日本山海名産図絵』によると、「椎の木甚多く、其实海に入り魚の飼（えさ）とす。故に美味なりといへり（陸上の椎の実が海に落ちてそれをブリが食べるからおいしいのだ）。」とある。これは、森あるいは木と海の連関を江戸時代の人々が考えていたことの証。現在、立山の豊かな水資源が富山湾の海底から湧いてくることを知るようになった。時代は変わっても、物の循環というのは重要だと思う。

（コンブ・ロード）

- ・近世期には、蝦夷地産のコンブを琉球王国経由で中国に輸出する「コンブ・ロード」があった。その日本海をつなぐ海の道の中心にあったのは富山。
- ・その名残として、現在でも富山県はコンブの消費量が日本一。

（富山湾を取り巻く環境の変化）



- ・大型クラゲが大量発生し、日本海全体にとっての大きな問題になっている。
- ・ブリは、1970年代までは、アリューシャン低気圧が強く海が寒冷で捕れなかったが、90年代から捕れるようになった。こうした変化を「レジームシフト」というが、地球温暖化などで水温が大きく変わると捕れる魚も変わる。

(海から考える富山の未来)

- ・国交省海洋政策課の大沼課長は、日本の未来、海洋観光を考える場合、海洋管理と経済活性化が重要と言っている。これを富山湾に当てはめると、①森と海の連関（湧水の保全）、②外洋性で護岸が多い、③海洋レジャーをどうするか、④深海資源をどうするかなど、いろいろな課題がある。特に、沿岸の漁業権と、遊漁者やダイビングなど海洋レジャーとをうまく調整していくことが富山湾を生かすという点で最も重要。
- ・このほか、①ゲンゲ、マトウダイ、ガスエビなどブランド魚以外の魚介類をブランド化するのか、②魚津水族館をどうするのか、③ツーリズムや研究、食文化をどうするか、などの検討が必要。
- ・自然と付き合う姿勢を保つことが、未来の富山の人により元気になるための一つのきっかけになってほしいと思っている。

「富山湾の魅力とその可能性を考える」

コーディネーター

秋道 智彌 氏 (総合地球環境学研究所名誉教授)

パネリスト

寺島 紘士 氏 (海洋政策研究財団常務理事)

佐藤 安紀子 氏 (NPO 海のくに・日本編集長)

稲村 修 氏 (魚津水族館長)

○秋道コーディネーター

- ・ベトナム・ハロン湾は、世界遺産にもなっており風景はきれいだが水が汚い。湾クラブ加盟湾は世界に38湾あるが、抱えている問題がそれぞれ違う。共通の普遍的な価値がある訳でなく、富山湾は富山湾らしさを大切にすべき。
- ・氷見ではかつて定置網サミットを開催したが、魚津でも、カニやイカ、エビなどのサミット開催を考えてはどうか。
- ・海に関する素晴らしい小説や詩を副読本などで教えることで、魚離れを防ぎ、魚を食べることへの回帰につながる。
- ・富山にある15市町村全部が海に面しているわけではないが、川の上流、中流、それを含めて、海は森と全てつながっており、市町村レベルでもいろいろな取組みを考えるべき。
- ・湾クラブについては、持続的で、かつ上下、左右につながる取組み。また、環境と自然、文化の関わる話であり、将来の子どもたちへの財産、宝物として残していきたいもの。



○寺島 紘士 氏 (海洋政策研究財団常務理事)

(富山湾域の魅力倍増計画の策定)

- ・2007年に海洋基本法が成立。海と陸の問題を一緒に、また、環境と開発の問題を一緒に考え、計画を作り、取り組むことが世界的な流れ。
- ・富山湾のように大きな湾となると、県がリーダーシップを取ることが必要だが、それと並行して、主な市町村がそれぞれ計画を作って、県の計画とうまくすり合わせて進めるのがよい。長崎県の大村湾では環境保全活性化行動計画を作って、県がリードしてよくやっている。
- ・富山湾から立山連峰までを一体的に沿岸域として捉えて、地域が連携。協働して総合的な「富山湾域の魅力倍増計画」を策定し、取り組むことを提案したい。「海を生かしたまちづくり」と言い換えることもできる。



（海洋観光の振興）

- ・国の海洋基本計画の中で、「海洋観光の振興」が新しく取り上げられた。2020年にはクルーズで100万人の誘致を見込んでいる。

（環境保全活動の中心地）

- ・県は、日本海の海洋環境の保全、海洋調査等の取組みの中心として活動することをもう少し意識的に進め、富山の存在価値を外に向かって発信することが非常に重要。

（日本海側の物流拠点としての重要性）

- ・中国の経済発展に伴い、日本海を通過して中国や韓国へ行く物資も増えており、それと日本経済をどう結びつけるかによって、富山港の存在意義・存在価値は大きく変わる。
- ・また、クルーズ船の誘致も重要。富山湾における伏木富山港の活用を考えるべき。

（海洋教育の推進）

- ・学校教育と水族館や博物館等の社会教育施設、水産業や海事産業等の産業施設、海洋に関する学習の場を提供する各種団体等との連携を促進して、その地域を将来背負って立つ子どもたちに対する海に関する教育を行い、海の重要性、富山湾の重要性を知ってもらうことがとても大事。
- ・子どもたちの受入れでは、小浜市の阿納地区の漁協が、いけすから魚を釣って、自分でさばき、自分が作った料理を食べるという取組みを民宿とともにしているケースがある。佐賀県では、漁協の女性部が中心になって、三重県の志摩市では自然学校を設置して、海なし県の子どもを受け入れている。
- ・海洋政策研究財団では、学校教育で海を教えることができるように、教育と海洋の専門家で、具体的なモデルカリキュラムを作っているのを利用いただきたい。

○佐藤 安紀子 氏（NPO 海のくに・日本編集長）

（海のくに・日本の現状）

- ・日本は海に囲まれ、海に生かされてきた国なのに、国民が海や魚から遠くなってしまっている。しかし海の持つ可能性や海が日本を守ってきたことを考えれば、海は日本にとって大切な存在でありつづけている。魚食文化は日本の基本食として日本人の健康長寿を支えてきた。
- ・世界を見れば、これまで海や魚に無関心だった諸外国までが、海底資源や魚のヘルシーさに注目し行動を起こしている。日本は国民的な運動として海と魚の大切さを伝えるべきだと考え平成5（1993）年に自分たちで立ち上がった。以来、活動22年目を迎えている。
- ・国内では、昭和30年代から米国と米国に協力する農水省の政策により肉とパンの食事、フライパンと油を使った洋食が広がった。その結果、肉食は増加し続け、平成18年には魚と肉の消費量が逆転している。漁業就業者数は50年前の5分の1にあたる18万人で、60歳以上が5割となっている。
- ・私たちは海と魚をめぐる日本の現状や、魚の大切さを伝える活動を広げようと考え、消費者への啓蒙活動として「浜のかあさんと語ろう会」、こども達の教育活動として「こどもとサカナ体験ツアー」「こども・海とサカナのフォーラム」「われは海の子活動」などを行っ



ている。

（こどもたちに日本の姿を伝える）

- ・2006年には、日本はクジラを捕って食べてきたことを、世界の大きな視点の中で書いた本を日本語版と英語版で出版。現在、教科書に掲載されるようになった。
- ・今後、日本の海と魚の大切さを伝える本を作り、全国2万3千の小学校に配布したいと考えており、是非1冊目は富山版から作りたい。
- ・富山県は立山連邦から富山湾につながるすばらしい自然資源を持っている。そして山が与えてくれた名水、富山湾がもたらしてくれた水産資源、それを生かしてきた先人の知恵が豊かな食文化をつくってきた。富山県人は他県には無いすばらしい財産を持っている。ぜひとも修学旅行生やアジア各国、欧米諸国の観光客を受け入れて、継続的な交流先を見つけたり、あるいは世界の美しい湾との交流などができるのでないか。
- ・教育分野では、1週間に1回は富山の魚を食べることを学校給食で定番化して1年間継続することや、日本の湾のサミットを富山で開くことで、富山湾が誇るべき財産であることを再確認できるのでないか。

（新たな取組み）

- ・アフリカ西海岸では日本と同じような魚がとれる。しかし、先人が食べてきていない国では魚が有用な食料になっていない。干物や燻製がせいぜいで、価値が生かされていない。一方、我々の祖先は、よくぞこんなに素晴らしい食材を見つけ、食べ方を伝え、おいしい保存食を今に残してくれたと思う。
- ・こうした思いから、平成23(2011)年からアフリカへすり鉢とすりこぎを背負って出かけ、沿岸部の女性漁業者に魚の利用についてのワークショップを行っている。アフリカ沿岸部の栄養改善や女性たちの仕事づくりを目的にし、まだスタートしたばかりであるが、大きな手ごたえを感じている。
- ・富山県においても、富山の海が持つ潜在力や財産はたくさんある。それを生かす方策を市民に公募すると、いくつもアイデアが出てくると思う。これを一つ一つ形にしていくことが湾クラブを盛り上げることになると思う。
- ・今日を契機として、みんなで一緒に魚を食べること、作ることなど、小さなことから始めていただいて、魚のことを話し合う場を作っていただきたい。

○稲村 修 氏（魚津水族館館長）

（魚津水族館の歴史）

- ・一昨年100周年を迎えたが、その際に「現存最古の水族館」というキャッチフレーズを共同通信がつけてくれた。
- ・初代の水族館の時代から、富山の川の魚、海の魚を中心に展示しているが、今後は「もっと富山にこだわりたい」と考えている。
- ・100周年を記念して『富山のさかな』という本を出したが、このレベルの本を出している県は他にはない。



- ・今の水族館は33年たっているが、魚津市だけでは新しいものは造れない。だから、今の水族館をどう使えるかを考えている。水族館を使う人たちのサポーター制度を作りたいと思っている。

（富山湾の水循環）

- ・沿岸近くから深い日本の三大深湾、駿河湾・相模湾・富山湾のうち、日本海側にあるのは富山湾だけ。
- ・富山湾は、ビールと泡が7対3で注がれた生ビールのようなもの。上部の泡のところが対馬暖流で、下の液体のところが冷たい深層水という構造。

（富山湾のさかなたち）

- ・富山県の魚を3つ、「王者ブリ」「神秘ホタルイカ」「宝石シロエビ」。マダイは海の王者で、かつて魚津では鯛網漁が行われており、当時の天皇陛下が見に来られた。
- ・ハマチというと、東京方面の方は養殖ものだと思うが、富山のハマチは天然の一歳魚。

（海洋レジャー）

- ・富山湾では、ダイビングがはやってきていて冬に潜っている。マリンスポーツも進みつつある。
- ・地元のホテルから「夏、お客さんに魚釣りをさせたい」と相談された。毎日釣りに来る地元の人を、県外客に釣りを教えるインストラクターとして活用するシステムを作れたら楽しいし、ホテルも期待していると思う。
- ・沿岸には平日でも釣り人が多い。富山湾はすべて釣り場である。冬に朝日町宮崎で、フクラギ釣りをしているが、あれは東京からのツアーもある。